

Title	昭和三十八年度史学科秋季見学旅行記
Sub Title	
Author	桑田(Kuwata) 米田(Yoneda)
Publisher	三田史学会
Publication year	1963
Jtitle	史学 Vol.36, No.4 (1963. 12) ,p.116(536)- 118(538)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	彙報
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19631200-0116

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ハーベルト本山の重慶遊

近森正邦“Kwan-chih Chang: Major

Problem in the Culture History
of Southeast ANA”

十一月二十九日（金）若見隆君
「ハーベルトにおける最近のイラン研究」

西洋史学全例会

昭和三十八年五月十八日（土）三田、五四五番教室

F. Cumont のシリア古代宗教史研究の一侧面

小川英雄氏

昭和三十八年六月十一日（水）三田、第四会議室

反ユダヤ主義の理解における方法の問題 下尾良策氏

昭和三十八年六月二十九日（土）三田、一一〇番教室

Edward I の軍制，Distraint of Knighthood

森岡敬一郎氏

昭和三十八年九月二十八日（土）三田、一一四番教室

マイネツケとワイヤー共和国 米田治氏

昭和三十八年十一月十三日（水）三田、一一三番教室

Biens Nationaux 鈴木泰平氏

昭和三十八年十一月三十日（土）三田、一一一番教室

マヤ文化からアステカ文化までの史蹟（スライド使用）

西岡秀雄氏

昭和三十八年度史学科秋季見学旅行記

十月十五日、前嶋、浅子、河北、神山、高橋各先生及び学生五十余名の史学科一行は、十二時五〇分平駅到着、直ちに貸切バスで内郷の白水阿弥陀堂を訪ねた。堂の周囲に蓮池の阿弥陀堂とも異称されたほどの背後の山には瀑布がかかっていたという所謂浄土式庭園の面影を有するその様相は、小堂宇であるが宝形造り、壯重雄麗な和様建築を一層鮮明に浮かび上らせていた。堂は永暦元年岩城氏の後室徳尼の創建と伝えられ、一に光堂と呼ばれた堂宇である。堂内を拝観する。浅子先生の詳細な説明に依れば、当初化粧屋根裏であった外陣は、内陣同様小組格天井と変り、各格間、長押、周壁などに彩画の跡があり、また内陣柱は所謂卷柱で、丸鉢・宝相華形金具は平泉系文化の特色をよく物語つてゐる。須弥壇上にその左右に寺伝持国（寺伝広目元）多聞の二天を配する阿弥陀三尊像は、純然たる藤原末期の様式で魚鱗式多弁蓮華座、華盤受座などを備えた優麗な台座、飛雲の透彫に飛天を配した華麗な光背まで完備しているのも珍らしいという。辞去后平市内に戻り、古文書見学班、古墳出土品見学班に分れ、前者は市公民館で浅子、河北、高橋諸先生の指導下、大国魂神社所蔵の国魂文書廿三点を見学。同文書は安堵状、軍忠状、著到状など各種のものに亘り、就中顯家花押の下文、尊氏袖判のものなど、南北朝期史料として重要なも

の丈に興味深かつた。一方後者は前嶋、神山両先生と共に磐城校高に於て、石城郡神谷作古墳より出土した七・八世紀頃のもと推定される重要文化財指定埴輪女子像及び男子天冠埴輪坐像を見学。三時過ぎ夫々帰宿した。

十六日平発の列車で郡山に向う。バスに乗換え円寿寺に到り奈良末期から平安初期頃の作といわれる二彩釉水瓶、円面硯破片、香炉形瓦器、須恵器水瓶などを見学。金透小学校に向う車中で昼食。同校は明治八年創建の、後刻見学した安積高校、開成館と共に、明治初期東北地方に普及した木造洋風建築の一で、明治天皇行幸の砌迎賓館として使用された一棟が原形の儘遺存している。同校に別れを告げ近くの如宝寺を訪ねる。笛久根上人開山以来約千年の歴史を誇る同寺も、戊辰の戦火で殆ど焼失し、再建された總櫻造りの善美を尽した本堂、寛延四年の鋳造で五個の撞座を持つ疣なし鐘などは扱置き、国宝殿安置の、正面に阿弥陀如来坐像半肉彫背面に大日如来を中心とした八葉の種子曼荼羅を陰刻した石造笠塔婆、上部に阿弥陀種子曼荼羅下部に造塔願文を記した板石塔婆には、夫々承元二年、建治二年の刻銘があり、石造供養塔婆の先駆源流を為すものとして甚だ貴重である。さらに本堂で虎丸長者屋敷跡と称する地から発掘された平安期の珍らしい布目瓦及素弁六葉同八葉の鎧瓦を見学後同寺を辞し、バスで安積高校を経て開成館に向う。開成館は明治六年開成社がこの地一帯の開墾を為すに当つて建てられた

もので、明治七年竣工の洋風三層楼であるが、現在は破損著しく廃屋と化している。ただ明治初期の洋風建築の通有性として正面玄関の唐破風様の屋根、三階の花頭窓くずし、同三階バルコニー平桁の立字形模様等いずれも伝統的な社寺建築の様式が窺われて興味深いものがある。一行は車窓から熱海、玉川温泉の湯煙を樹間に眺めつゝ中山宿で下車、曾ての鄙びた宿場の様相に想いを馳せた。稍々疲労気味の一行をバスは猪苗代湖畔の元高松宮別邸現天境閣に運び込んだ。

十七日午前八時半、沛然たる雨中をバス二台に分乗して出発。まず飯盛山白虎隊の墓に参詣。旋回して昇降道を異にする栄螺堂の巧妙な建築法に感心。さらに鶴ヶ城址を見学。石垣を逼う真紅の薫が雨に濡れて美しい。次の目的地は瑠璃光山勝常寺。同寺は弘仁元年徳一の草創するところと伝えられ、本堂は方五間茅葺、屏層宝形に近い四注造で、室町初期のものである。新築の宝物殿には仏像十二体が安置され、正面には本尊藥師如来脇侍日光月光の二菩薩、四天王が居並ぶ。本尊は丈六の坐像で、二重蓮座に結跏趺坐し、舟形光背を負い、この光背には葡萄唐草があらわされておるところから、西方との関係が云為されるわけで、またその肉髻、螺髮の重厚感、狭小な額、丸く膨らむ頤など独特の地方色を帶び、所謂勝常寺式と称される所以である。脇侍は立像で豊麗典雅の風があり、四天王の力強い肢態、聖観音、十一面觀音、虚空藏菩薩等の立像——これらは

いすれも平安初期のものである一の端正な容姿、ほかに鎌倉期の二体の地蔵菩薩像等々、終始飽くことを覚えず仔細に拝観した。車中で昼食、塔寺の立木觀音を訪れる。堂は方五間、正面一間向拝付、壇層屋根四注造茅葺で、木割雄大、鎌倉時代の豪放な氣風をよくあらわしている。柱はすべて大円柱で、内陣には後壁に接して、八米に及ぶ千手觀音立像が安置されている。

その刀法は稚拙であるが、形相雄大よく堂の建築と共に鎌倉時代の特徴を示している。寺伝によれば、この像は自然の櫟樹をそのまま刻んだことであるが、成程境内には櫻、楠、銀杏の大木が多く樹齢を競つてゐる。同寺を辞し、一行は田子薬師堂へ車を進めた。堂は室町中期のもので方三間の建築、近年最初の宝形造を入母屋造に、茅葺を銅板葺に改めた。その構造はすべて唐様仏堂の手方に成り、須弥壇、厨子等優美にして、よく室町時代の特徴を有している。薬師三尊を拝して后一旦会津若松市内に戻り、宿泊地裏磐梯に着く頃は日も既に暮れた六時過であつた。

十八日快晴に恵まれ心氣爽快な一行は午前九時バスに乗車、檜原湖一周の途に着く。磐梯の雄姿、錦織宛らの紅葉、藍を溶かしたかのような湖面、秋の山水美を満喫し、湖畔で小休止して記念撮影を行う。会津盆地へ抜ける途中珍らしいホップの栽培を眺め、車は関柴の平林寺に着く。新しく発見された奈良前期の金銅聖觀音の小像を拝観して、昼食后直ちに喜多方願成寺

へ向つた。趣向を凝らした山門を潛り本堂へ入つた。本尊阿弥陀三尊像は共に寄木造漆箔寄木造、玉眼嵌入りで、鎌倉時代の作にかかる。所謂来迎三尊仏で、両脇侍が脆座しているのは東北地方では珍らしい。別院で行道面等を見学。素材は桐で、指先で支え得る軽さだつた。喜多方駅で帰宅を急ぐ者を降ろし、他は行程を続けて冬木沢の八葉寺に到る。堂は入母屋妻入形式の変つた阿弥陀堂で、よく室町末期の特徴を示している。内部中央来迎柱の前面に須弥壇を設け、その上部のみ鏡天井、他は化粧屋根裏とする等すべて唐様である。さて最後の見学は藤倉二階堂である。本堂は重層四注造本瓦葺、方三間の小堂であるが、周囲に裳層をつけ、柱間を開け放ち庇の間をつくつてゐたため、所謂吹き抜きとしているので、外觀が變化に富んでおり、内部も唐様の手法を用い純然たる室町時代禪宗仏殿様式を示している。

斯くて全行程を消化した一行は、改めて東北仏教文化の実態を再認識すると共に、古史料古文化等についての知見を広め、加えて裏磐梯の美しい自然の風物に接し得たことを喜びつゝ、会津若松駅で解散した。擱筆するに当り、今次旅行に際し種々御便宜を与えた向々、御配慮をいただいた方々に深謝する第である。

(桑田・米田記)